

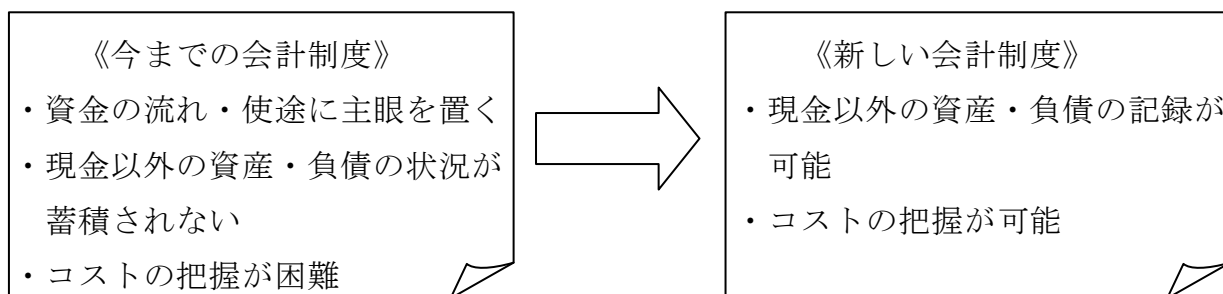
平成20年度

吉川市財務書類

1 はじめに

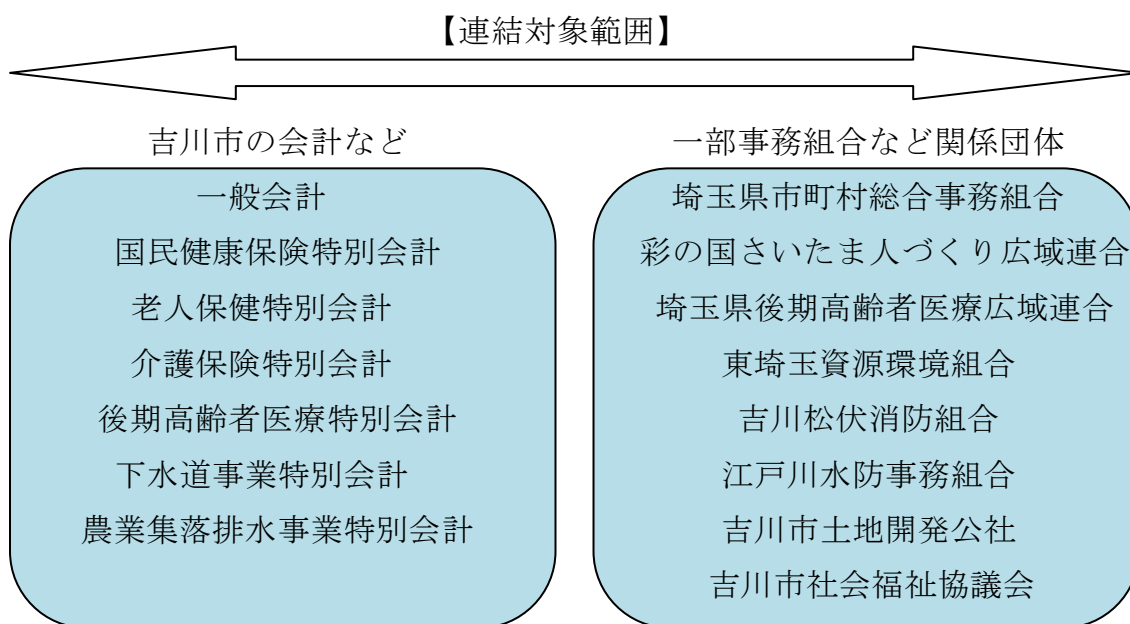
平成18年8月に「地方公共団体における行政改革の更なる推進のための指針」が総務省によって示され、民間企業における財務の考え方を取り入れた公会計制度の整備を進めていくことが求められました。

これによって、今までの現金主義による会計処理では見えにくかった資産・債務を把握し、財務状況の透明化を図るとともに、将来負担に対しての意識を高めていこうとするものです。



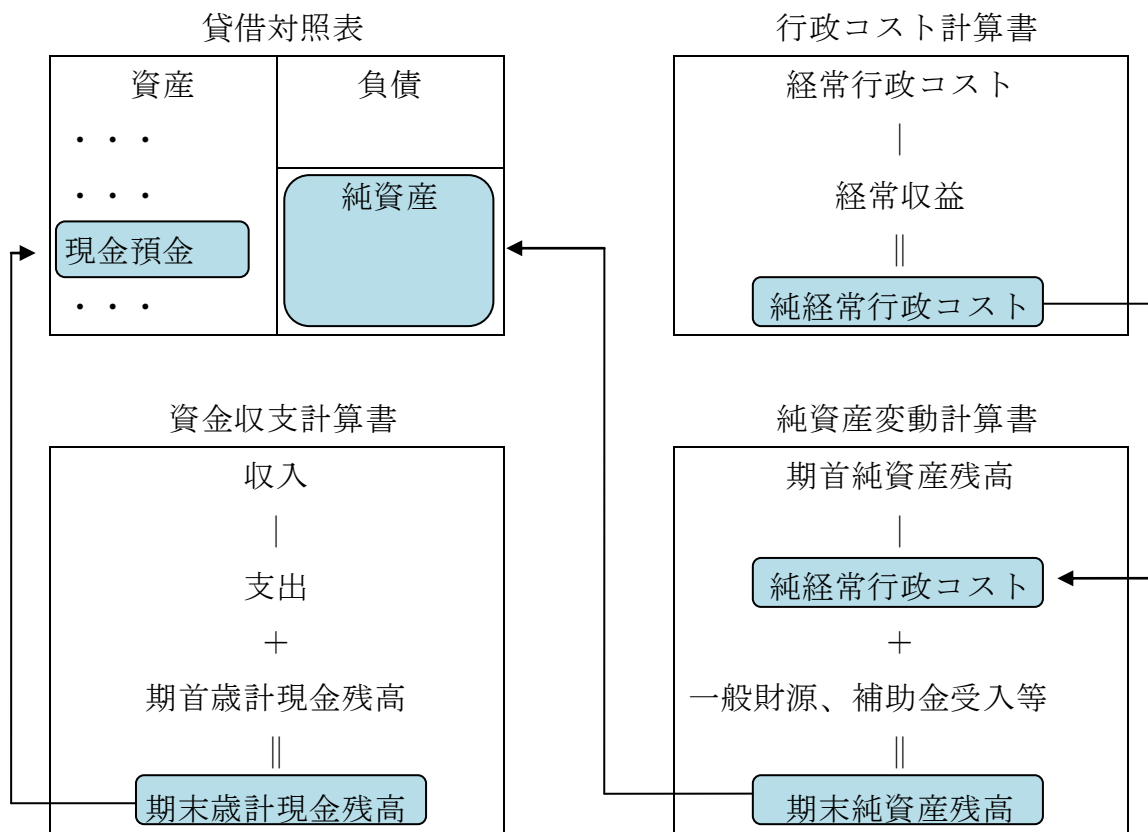
2 連結対象範囲

吉川市の一般会計に加え、特別会計や一部事務組合などの関係団体も含めて連結対象とし、財務書類を作成しています。



3 財務書類の相関関係

4つの財務書類は以下のように関連しています。



4 財務書類の作成モデルについて

財務書類の作成にあたっては、「基準モデル」、「総務省方式改訂モデル」の2つの作成モデルのいずれかを選択し、作成することとされています。吉川市は「総務省方式改訂モデル」を選択し、作成しております。

【基準モデル】

開始貸借対照表の作成にあたり、現存するすべての固定資産について公正価値により評価します。また、個々の取引情報を複式簿記の考え方に基づいて処理していきます。

【総務省方式改訂モデル】

固定資産については、売却可能資産から段階的に評価を行っていきます。既存の集計データを活用しているため、開始時の負荷が少ないと言えます。

5 財務書類

(1) 貸借対照表

建物や道路、現金などの資産と、それを形成するために要した負債などの財源との関係を表したものです。資産の合計額と負債・純資産の合計が一致しているためバランスシートとも呼ばれています。

貸借対照表（平成21年3月31日現在）

（単位：千円）

【資産の部】		【負債の部】	
公共資産	98,222,992	固定負債	28,858,455
（建物・道路などの資産）		（市債など1年以上に渡る負債）	
投資等	4,891,442	流動負債	3,119,811
（出資金・基金などの資産）		（賞与引当金など1年未満の負債）	
流動資産	4,867,071	負債合計	31,978,266
（現金・未収金などの資産）			
※うち現金預金	3,339,098	【純資産の部】	
		純資産合計	76,003,239
資産合計	107,981,505	負債・純資産合計	107,981,505

資産合計は107,981,505千円となっています。内訳としては公共資産が90.1%と大部分を占めますが、これは、道路などのインフラや施設などに投資してきたためです。

一方、負債は31,978,266千円となり、資産に占める割合は29.6%です。これはいわば将来世代が負担すべきもので、中でも市債など固定負債の占める割合が大きいことから、市債の管理には十分注意する必要があります。

純資産は76,003,239千円です。これは市税収入や国からの補助金など、返済の必要がないもので今までの世代によって賄われたものと言えます。

(2) 行政コスト計算書

資産形成以外のサービスを賄った経費と、その財源の関係を表したものです。
使用料・手数料などサービスへの対価のみ「経常収益」に計上されています。

行政コスト計算書（平成20年4月1日～平成21年3月31日）

（単位：千円）

【経常行政コスト】	
人件費 （職員給与・賞与引当金など）	5,136,237
物件費 （物品の購入・減価償却費など）	6,341,901
社会保障給付費等 （福祉の給付・補助金など）	17,851,370
その他 （支払利息・回収不能見込金など）	924,795
経常行政コスト合計（A）	30,254,303
【経常収益】	
使用料・手数料	361,964
分担金・負担金・寄附金	8,414,072
その他	4,589,778
経常収益合計（B）	13,365,814
純経常行政コスト（A－B）	16,888,489

経常行政コストの合計は 30,254,303 千円です。生活保護費などの社会保障給付費等が 17,851,370 千円で 59.0%と最も大きな割合を占めています。次いで物件費、人件費の順番となっていますが、例えば業務委託に係るコストは物件費に計上されているなど、同じサービスでもその実施の方法によってこの数値は変わってきます。

一方、経常収益は 13,365,814 千円です。経常行政コストから経常収益を差し引いた純経常行政コストは 16,888,489 千円となりますが、これは市税など他の財源によって賄うことになるものです。

(3) 純資産変動計算書

貸借対照表のうち、純資産について1年間の変動を表すものです。純資産は、資産から負債を差し引いたもので、会社で言いますと借入金以外の自己資金に当たり、行政サービスに係るコストをどの程度税金などの収入で賄っているかが分かります。純資産が増えていれば税金などの資産を将来の世代に残したことになります。

純資産変動計算書（平成20年4月1日～平成21年3月31日）

（単位：千円）

期首純資産残高	74,465,217
純経常行政コスト （資産形成以外のサービスにかかったコスト）	△16,888,489
一般財源 （市税・地方交付税など）	12,343,555
臨時損益	550,629
補助金等受入 （国からの補助金など）	5,330,105
その他 （資産評価替えによる変動額など）	202,222
期末純資産残高	76,003,239

期首純資産残高 74,465,217 千円に対して期末純資産残高は 76,003,239 千円となっており、1,538,022 千円増加しています。行政コスト計算書で算出した純経常行政コストに対して、平成20年度の市税や国からの補助金などを充てていますが、その上でなお、返済の必要がない資産が増加したものです。

(4) 資金収支計算書

資金の出入りを性質別区分に分けて表したものです。どのような活動に資金を要し、それをどのように賄ったかが分かります。

資金収支計算書（平成20年4月1日～平成21年3月31日）

（単位：千円）

1	経常的収支の部	
	支出	25,619,191
	収入	29,494,259
	経常的収支額（収入－支出）	3,875,068
2	公共資産整備収支の部	
	支出	5,721,743
	収入	5,063,832
	公共資産整備収支額（収入－支出）	△657,911
3	投資・財務的収支の部	
	支出	3,220,471
	収入	194,095
	投資・財務的収支額（収入－支出）	△3,026,317
	平成20年度歳計現金増減額（収支合計）（A）	190,781
	期首歳計現金残高（B）	3,148,317
	期末歳計現金残高（A＋B）	3,339,098

公共資産整備収支と投資・財務的収支については、赤字となっています。これは、公共投資や、市債の償還などの支出に充てるべき収入が不足しているためです。一方、経常的収支は黒字となっており、これによって全体としても黒字であるため、市の現金が前年度よりも190,781千円増加しています。